

希望を耕す

ハイブリッドと建築愛

東京大学 特任教授・建築学

松村秀一

Shuichi Matsumura

ノートルダム大聖堂の火災

私の最初の海外旅行の到着地はパリ。卒業旅行だった。その初日に訪れたのがノートルダム大聖堂である。中世にこれだけ巨大な建築が建てられていたこと、そして日本で見ることのできない石工の技の数々に心動かされた。

そのノートルダム大聖堂で大きな火事が起こってしまった。この原稿はその二日後に書いている。

日本が「木の文化」の国と言われるのに対して、ヨーロッパは「石の文化」の地などと言われる。ノートルダム大聖堂は外から見ても中に入っても石ばかりが目につくから、まさかあんなに燃えるほど木が使われているとは思いませんでした。壁や柱が石を積み上げてできていても、軽さが求められる屋根の構造には、多くの場合木が用いられた。しかも、TVやインターネットの報道で流される火災前の大聖堂の小屋裏を見ると、想像以上に大径の木材が多く使われていた。「石の文化」などと言っているが、ヨーロッパ各地には「木の文化」も深く根付いていたのである。

悲しい出来事であったが、その報道を通して、私は改めてこのことを強く認識した。

構造材料別という慣習

日本の建築界では、その伝統がないこともあって、石造はほぼ使われていない。構造材料は木か鉄（S）か鉄筋コンクリート（RC）のいずれかである。鉄と鉄筋コンクリートを合わせたSRCというものもあるにはあるが、新築分野でのシェアは小さい。

新築分野の延床面積で比べると、一九八〇年代辺りから、S造と木造がトップを争い、RC造がそれに続くという状況だが、いつも過半に達する者はない。

建築の学界では構造系が一大勢力を成すが、その中は長らく三種の材料別に画然と分かれてきた。「木の文化」の国などと言われるが、木造の研究者の数は圧倒的に少ない。耐震性、耐火性に乏しかった木造は、戦前から日本の建築学者たちにとって乗り越えるべき日常だったのだ。しかし時代は変わった。

地震の際の木造建築の構造性状についても多くが解明されてきたし、耐火性を強化する方法も開発されてきた。「石の文化」などと言われてきたヨーロッパからも、CLT（Cross Laminated Timber）を初めとする新しい木造建築技術が次々に入ってきている。そ

の上、今の日本は、国土保全に貢献する持続可能な林業経営を可能にする上で、年々太くなる杉等の森林資源を大いに使う必要に迫られている。

学界ではなく建築業界では、RC造しかできません、S造しか扱えませんとは言っていない時代である。新しい木造技術も使えなければならぬ。そうなってくると、ヨーロッパに以前から存在した適材適所のハイブリッド構造も、新たな開拓分野として注目されることになる。

学界では学問の継承性も重要だが、そろそろ構造材料別という慣習から自由になるべき時期ではないかと思う。

そして愛される建築へ

さて、再度ノートルダム大聖堂の火災についてである。私が驚いたのはあの燃え方だけではない。その直後から、これまで聞いたことのないような額の寄付の申し出が、世界中で相次いだことには大いに驚かされた。犠牲者が多数出るような災害ではなかった。大きくはあったが、

建物が部分的に壊れただけではある。しかしながら、日本での各種メディアの扱いも大きなものだったし、フランスの企業はともかく、アメリカの企業等の寄付の申し出も迅速で額も大きかった。ノートルダム大聖堂という建築への愛情の深さ、広がりが凄いのである。

世界遺産だという側面もあるだろう。信仰との関係もあるだろう。八五〇年にも及ぶ歲月の中で、様々な歴史的イベントがこの建築で重ねられてきたその特異さや象徴性も関係しているだろう。パリという世界都市のまさにへそに位置しているという立地も関係しているのだろう。そこに卒業旅行時の私が心動かされた建築としての魅力も重なってくる。

そう、理由はいくつでも思い浮かぶ。しかし、仮にそうだととしても、世界中からここまで広く深く愛されているという事実が、誰にでもわかる形であらわれた建築がかったのだらうか。木造であれ、S造であれ、RC造であれ、ハイブリッドであれ、これほどに人々から愛される建築が存在し得るということをわかっただけでも、私たちには大きな経験だったのだと思う。



2013年のパリ・ノートルダム大聖堂。1163年に建設を開始してから850年ということで、仮設の客席がつくれ、お祝いムードだった。